

2011 年度 国際ユース作文コンテスト受賞者

参加国数：140 カ国

応募総数：6,931 作品（子どもの部 2,535 作品、若者の部 4,396 作品）

文部科学大臣賞（最優秀賞）（各 1 点）

<子どもの部>

- 『地球のために植物を植えよう』
オーロナ・シャルカル
(バングラデシュ) 14 歳

<若者の部>

- 『仕事への誇り』
ダン・アーウィン・C・バガボロ
(フィリピン) 20 歳

優秀賞（各 2 点）

<子どもの部>

- 『私が大人になったら・・・』
ウンムル・バニーン・シーク（パキスタン
& カナダ<パキスタン在住>）10 歳
- 『誰が一番の理解者』
大山 藍（茨城県）11 歳

<若者の部>

- 『私を目覚めさせた悪夢』
クリスティーナ・カラウス（モルドバ）18 歳
- 『私を変えた体験』
ベエジャット・サハル・ジュナイド
(パキスタン) 22 歳

入選（各 5 点）

<子どもの部>

- 丹 由美子（日本<ガーナ在住>）10 歳
- 廣山 実穂（神奈川県）12 歳
- 水木 陽菜（長野県）12 歳
- レシャン・ルーニナ（ケニア）13 歳
- レイモンド・チョー（韓国<東京都在住>）14 歳

<若者の部>

- 对本 祝子（日本<イギリス在住>）16 歳
- パルバナナタン（シンガポール）16 歳
- 山口 理伎（東京都）17 歳
- ハレン・イセリッチ
(ボスニア・ヘルツェゴビナ) 18 歳
- ンカチュクワ・ンネベンチュクワ・フレドリック
(ナイジェリア) 24 歳

佳作

<子どもの部> 25 点

- 岡本 千紗子（東京都）8 歳
- 前田 悠馬（日本<パキスタン在住>）9 歳
- イシュタ・スリバスターバ（インド）11 歳
- アニー・ヤン（中国<アメリカ在住>）12 歳
- アンナ・モシュキーナ（ロシア）12 歳
- ヘオ・ジー・ウォン
(韓国<フィリピン在住>) 12 歳

<若者の部> 24 点

- 佐々木 紅音（宮城県）15 歳
- 佐藤 愛依（宮城県）15 歳
- アブロール・ダダソノフ（ウズベキスタン）17 歳
- アレハンドラ・レタナ・ベタンコート
(メキシコ) 17 歳
- 大藪 光俊（京都府）17 歳
- ガラ・パテンコビッチ（セルビア）17 歳

- 鶴見 章（長野県）12 歳
- フォウスティナ・チャヌーゴ・オディリ
（ナイジェリア）12 歳
- 安藤 鞠花（大阪府）13 歳
- 市川 舞（長野県）13 歳
- 岩本 茉央（大阪府）13 歳
- 小林 可奈子（長野県）13 歳
- 小山 晴子（東京都）13 歳
- 鈴木 美紀（宮城県）13 歳
- アイシャ・ブット（パキスタン）14 歳
- アリシア・ライ（アメリカ）14 歳
- 石田 昌也（長野県）14 歳
- 上西 理奈子（東京都）14 歳
- カイナット・アフサル（パキスタン）14 歳
- サシア・ドゥマラン（フィリピン）14 歳
- シャニア・ルイソン（グレナダ）14 歳
- チュン・ウー・チャン
（韓国＜フィリピン在住＞）14 歳
- 高本 沙耶（京都府）14 歳
- 福原 光（東京都）14 歳
- テット・チリ・アウン
（ミャンマー＜シンガポール在住＞）14 歳
- リン・チン・イン（台湾）17 歳
- 野口 倫太郎（東京都）17 歳
- 及川 梨恵（宮城県）18 歳
- ケネッチ・ブチエ（ナイジェリア）19 歳
- スマン・マンダル（インド）19 歳
- ディーナ・ナシャット・モハメッド
（エジプト）19 歳
- シュラダ・パンディ（インド）20 歳
- ヌルバキット・ザキポーバ（カザフスタン）20 歳
- ジョヤル・トーマス（インド）21 歳
- チャン・グエン・ホアン・ティ・トー
（ベトナム）21 歳
- アビリティ・カカマ（タンザニア）22 歳
- リナ・アリヤンティ・デウィ
（インドネシア）23 歳
- カルラ・ガブリエラ・エルナンデス・アギラール
（メキシコ）24 歳
- クリシュナダス・ナナス（インド）24 歳
- スプハッシュ・ギミレ（ネパール）24 歳
- スソージ・ジャビエ（ウガンダ）24 歳
- エリザベス・ジョーキ・ワイタカ（ケニア）25 歳
- ズフル・ヤシン・イブラヒム（ソマリア）25 歳

学校特別賞（2 校）

- 市川中学校・市川高等学校（千葉県）
- 宮城県迫桜高等学校（宮城県）

学校奨励賞（11 校）

- 沿岸地域工科大学（エクアドル・グアヤキル市）
- 京都学園中学高等学校（京都府）
- 昭和女子大学附属昭和中学校・昭和高等学校
（東京都）
- 智辯学園高等学校（奈良県）
- トキワ松学園中学校（東京都）
- 氷見市立朝日丘小学校（富山県）
- 大田区立大森第六中学校（東京都）
- 麹町学園女子中学校（東京都）
- セント・メリーズ・インターナショナル・スクー
ル（東京都）
- 同志社中学校（京都府）
- 日本大学三島高等学校（静岡県）

地球のために植物を植えよう

（原文は英語）

オーロナ・シャルカル（14 歳）

バングラデシュ・ダッカ市

ホーリー・クロス女子中学校

それは、晴れた秋の午後でした。鳥の群れがさえずり、太陽は金の円盤のように輝いていました。でも、そんなさえずりや光景も、私の耳や目には入りませんでした。私はぼうぜんと窓のそばに立って、うつろな表情で、一番親しかった幼なじみが、残酷に斧で打たれながら倒れていくのを見ていました。

鳳凰木という木が、私の家のそばにありました。私はこの木を見ながら育ちました。この木も毎年大きくなりました。私のベッドからも見えました。なので、朝起きると、最初に目に入るのがこの木でした。私の一日は、この美しい緑の葉を見ることから始まりました。夜寝るときは、辺りは暗くなっていました。それでも、私は、窓からこの木を一度は眺めました。真っ暗な中でも木を見つめるのが好きでした。なぜなら、その木が、そこにあるのが分かっていたからです。

この木の高い枝が、地面に接するのが見えました。私の目の前で、その木は顔から倒れていきました。木は他の人の所有物なので、黙って傍観するしかありませんでした。愛らしい木は、一時間あまりで切り落とされ、後にはいつまでも続く空しさが残りました。それは、その場所に空しさが残っただけではなく、地上から生命が消えていくことでもあったのです。部屋の中に目を向けると、そこには従妹が穏やかにゆりかごで寝ていました。従妹と同じように、一時間前までは、木は命を持ち、生き物として存在していたのです。起こったことに愕然としながら、初めて私はある思いに襲われました。激しい痛みを感じました。それは私が思いを寄せた鳳凰木に対してだけではなく、人間の無謀な本性に対し、深い思いに沈みました。

私の心に大きな疑問が湧きました。もし、私たちが今、消費することばかりを考え、未来のことを考えないのであれば、私たちの滅亡の始まりになるのではないか。環境を開発することによって、今、私たちは様々な恩恵を受けていることは事実です。しかし、このような身勝手な動機を満たしていた



のでは、いずれ地球全体の破壊につながることにあります。何百万年もの時をかけ、この地球ができたのに、こんな終わりを迎えていいのでしょうか。

こうした思いが、私の考え方にはっきりした変化をもたらしました。以前、こうした問題について読んだり、考えたりしたときは、私がつくり出した問題ではないし、自分の力ではどうにもならないと自分自身を慰めていました。しかし、その出来事の後、私の考え方が違ってきました。というのも、初めて問題が実感できたのです。私は、ささやかな一歩ではありますが、小さなことから始めることにしました。私は、母なる地球の娘として、母を救うためにできることなら何でもするのが私の責任だと感じました。小さな木を我が家の屋根や庭に植えることから始めました。友だちには、誕生日のプレゼントとして、ビデオゲームではなく、植物をあげることを始めました。私の周りにいるあらゆる人たちと自分の考えを共有しました。皆には、植物を育み、育て上げることはいつまでも変わらない喜びだと話しました。皆も次第に、同じように考え、感じ始めました。私たちは、小さなことであってもできることは何でもやりました。図画の先生の力を借りて、学校のクラス対抗のアートコンテストも開催しました。コンテストのテーマは、「あなたの夢の庭」でした。

こうした小さな行動が、皆で力を合わせてすることで、私たちの周りの環境に大きな変化をもたらし始めました。一日ごとに、近所の子どもたちや他のクラスメイトたちも、私たちを見て刺激を受けるようになりました。私たちは、よく集まって、環境のために何ができるか話し合いました。歯磨きをする間、蛇口を開けたままにしておかないことを決めました。私たちグループの一人は、ジャンクフードが好きでよく食べていました。でも、これからは食べないと彼女は言っています。私たちは皆、スクールバスやその他の公共機関を利用して学校に通い始めました。電灯、扇風機、コンピューターなど、使わないときはスイッチを切って、できるだけ電気を節約する努力をしました。

私は、一部の残酷な人の手によって、一人の友だちを失いました。しかし、その痛みを一つの約束に変えました。私は、自分にできるあらゆる方法で地球を救うことを約束します。以前の私の好きな色は青でしたが、今は緑です。緑の地球の夢を見ます。そこは、汚染もなく、鳥や動物たちが自由に生きています。世界中が緑の植物で埋まるのです。私は心に誓います。「地球のための植物を植えよう」と。

仕事への誇り

（原文は英語）

ダン・アーウィン・C・バガポロ（20 歳）

フィリピン・マラボン市

サント・トマス大学

フィリピンの看護学生は、なかなか大変な状況にあります。卒業後には何千という求職者との競争が待つ就職難のことを考えておかねばならないからです。看護学校を出ても全く就職できなかったり、失業してしまう人がたくさんいます。こうした事情から、悲しいことに、まるで不名誉な烙印を押されてしまうのです。専攻を聞かれ、看護学と答えるたびに、皆まるでだめだというように首を振るのです。

私もこの職業に就いて、すでにたくさんの人からかわれています。ある時、友人たちから「4 年も勉強してその拳句は？ 病人用の便器を洗うだけじゃない？」と軽口をたたかれました。この偏見を持った発言は確かにこたえました。自分自身を取るに足りない存在と考えるようになりました。学校に行ってもやる気が起こらず、勉強にも身が入らなくなりました。「君はどのみち、看護学生に過ぎないのだから」と彼らは言いました。

しかし、3 年生の夏のことです。全く思いがけない場所で、私は感銘を受ける出来事に出会いました。その年の 4 月、友人たちから論文の手伝いを頼まれました。友人たちは高齢者の孤独について研究しており、老人ホームの入居者へのアンケート配布の手伝いを頼まれました。高い塀に囲まれた人里離れたその施設へ、長い道のりを訪ねて行きました。とても穏やかで静かなところでしたが、管理が行き届いているとはいえない状態でした。廊下は鼻につく匂いがし、憩いの間はひどい状態でした。世話役のスタッフは、施設の維持管理に最善を尽くしていましたが、人手不足と資金不足は明らかでした。

面談を通して、入居者のそれまでの経緯などを知るようになりました。大半の人は路上生活から保護されたか、家族に捨てられた人たちでした。とくに記憶に残っているのは、ある老女との面談です。彼女の話によれば、数年前はホームレスで、たまたま家族と離れたときに当局に「保護」され、家族と離れ離れにされて、老人ホームに連れてこられたということでした。それ以来、家族とは一度も会っていないそうです。その後も、自分の状況と体験を話してくれました。ずいぶん前から高血圧と関



節炎がひどいけれど、施設では一貫した医学的な管理や助言がないので、ほとんど治療がなされていないことも分かりました。家族との再会を手助けしてくれる方法はないかまで尋ねられました。

正直なところ、どのように対応したらよいか分かりませんでした。家族との再会を手助けしたいのは山々でしたが、資金その他頼りとなる手だても限られていることから、それは到底無理でした。私は、ただ黙って彼女の話聞くしかありませんでした。しばらくして自分でできる高血圧と関節炎への対処方法として、生ニンニクを食べたり、痛みのある箇所に温湿布をすると良いと教えてあげました。看護学生として、おそらくそれが私にできる全てでした。その後も雑談を続けました。そうしているうちに彼女の気持ちが明るくなってきたことに気付きました。すでに私たちは何度か笑い合っていました。面談が終わる前に、彼女は私の名前と専攻をもう一度尋ねてきました。「ダンと言います。看護学を勉強しています」と答えました。その時です、今でも私の心に刻まれている言葉を彼女が言ったのは。「ありがとう、ダン。あなたのために祈っているわ。あなたが無事、看護学を修めることを祈っていますね」と。その後、私は面談した他の人たちに対しても、できる限り話に耳を傾け、健康面についてできるだけ助言するように努めました。私が、自分たる者について、自分がしていることについて、その重要性に気付くことができたのはこの日のことがきっかけでした。私は、ただ面談をしているだけではなく、実はケアを施していたのです。

看護師はケアを行う訓練を受けますが、話を聞くこと、そして健康について指導することもケア行為の一つであることに気付きました。私は自分の職業を新たな視点で見えるようになりました。考えなければならない最も大切な問題は、「卒業後、どのようにうまくやっていくのか」ではなく、「結局、どれだけの人の手助けができるのか」ではないかと気付いたのです。その日の経験は、「人の人生に影響を与えるのは、優れた学位でもたくさんのお金でもない。必要なのは、人の話を聞く耳と、共感できること、そして基本的な実用知識だ」ということを教えてくれました。

その夏以降、学業に一層励み、様々な団体に積極的に加わるようになりました。私たちの赤十字部門で活動を開始し、医療ミッションにも参加し始めました。さらには、卒業したら老年に関する研究を専門にしようと計画しています。将来いつかまた、あの老人ホームに戻って違う研究をしたい、少なくとも入居者の生活が改善されるように何かしたいと考えています。入居者の方々の話を聞いたおかげで、こうして自分自身の話を書く強さと決意を持てたのですから、そのお返しがしたいのです。私は、ただの看護学生に過ぎないではありません。看護学生です、と胸を張って言えるようになりました。そう言える誇りを私から二度と奪うことは誰も決してできません。

私が大人になったら・・・

(原文は英語)

ウンムル・バニーン・シーク (10 歳)

パキスタン & カナダ <パキスタン・ラホール市在住>

ビーコンハウス・スクール・システム・リバティ・ジュニア

私はいつも、大人になったら何になろうか考えていました。私の両親は、医者になれと言いますし、友だちはみんなパイロットになりたがっています。でも、私は、友だちみんながなりたがっているものは好きではありませんでした。何になればいいかわかりませんでしたが、ある日、ついに私は決めました。

家を掃除して、道にゴミを捨てないようにとよく聞かされていました。お母さんは、いつも、水を無駄にせず、余計なスイッチは切って、電気を節約するようにといいます。私はいつも、お母さんの言うことは聞かず、自分のしたいようにしていました。

ある日、学校の社会見学で、私たちのクラスは、パキスタン北部のとても遠いところに出かけました。そこは、人が多く住む村でした。とても混みあったところでした。いたるところに家がたくさん建っていました。でも、私の家とは違いました。とても小さくて、汚れていて、とてもひどい臭いがしました。私と同じ年頃の男の子や女の子が、電気も水道もなく、お料理をするためのガスもない家に住んでいるのを見ました。

通りから通りへと歩いていると、突然泣いている小さい男の子に会いました。「どうしたの？」とたずねました。男の子は、最初、何もこたえませんでした。大声で泣き出し、お腹が空いて、食べるものがないと言いました。私は家からもってきたサンドイッチをあげて、男の子と友だちになりました。

男の子は私に村の中を案内してくれました。男の子の名前は、アリでした。アリは、以前は、お父さんがいろいろなところからゴミを集めてくるのを手伝っていたそうです。アリはまともな服を持っていませんでした。貧しく、学校に行っていないそうです。私は、その村でたくさんの私と同じ年頃の子どもを見ましたが、みんな学校に行っていない子どもばかりです。学校が一つありますが、1 クラスに 50 人以上もの子どもがいます。

アリは、自分の家族が住む電気も食べ物もない小さな家に私を連れて行きました。アリと家族がかわいそうに思えました。私は、自分がとても恵まれた生活をしていることを知り、神様に全てを感謝しました。

壊れた自転車や家が目につきました。ゴミは全て、汚い川に捨てられていて、そこでは、大人や子どもが水浴びをしていました。村の人々を見て、大変なショックを受けました。

私は、先生に自分が見たことを話しに行きました。私は、世の中のために、自分が何かしなければならないという気持ちになりました。世界には、貧しい村がたくさんあることを知り、とても気の毒に思いました。アリと彼の友だちのことを考えると、泣けてきました。先生は、私たちに、水、電気、食べ物など私たちの周りの役立つものを大切にして、みんなに公平に行きわたるようにしなければいけないと言います。

私は、大人になったらパキスタンの人々を救うため大統領になろうと決めました。この体験から学び、自分も節約し、貧しい人を助けたいと思うようになりました。私は、両親と近所の人たちをその村に連れて行き、できるだけものを、その人たちに寄付しました。また、私は大統領に手紙を書いて、ひどい家に住み、食べ物もない村の人々を助けるようお願いしました。大統領が手紙を読んでくれることを願います。また、私はアリを私の家に連れて行き、2人で一緒に私の学校に通うようになりました。アリを見ていると、いつもとても嬉しくなります。

私は、子どもはみんな貧しい人々を助けるべきだと思います。そして、神様が与えてくれた全てのものに感謝すべきだと思います。

これが、私が心を動かされた体験です。この体験によって、私は少し成長しました。貧しい人々を助け、お金持ちと貧しい人々が一緒に仲良くなれるようにして、この世界をよりよいところにしていきたいです。私は、この地球と地球に住む人々が好きだから、そのためには何でもします。

誰が一番の理解者

(原文)

大山 藍 (11 歳)

茨城県

小美玉市立玉里北小学校

「誰が一番の理解者だと思う？」

父のこの言葉が私を変えました。

母とよく一緒に買い物に出かける近くのスーパーでは、障がいをもった男の人が働いていて、奇妙に足をくねらせながら歩いていました。背筋をぴんと伸ばせば背は高いと思うけれど、いつも肩をまるめ猫背なので、とても小さく見えます。私は、気の毒に思ったのか、かわいそうと思ったのか、自分でもよくわからなかったけれど、何となく、自分の視界の外にその人を追いやって見ないようにしていました。その人を見かけると、わざわざ遠回りしたり、別の入り口から入ったりして、とにかく顔を合わせないように努力し、たまたま、居合わせたときは、走ってその場を離れたりもしていました。

ある時、私は買い物をしている母を車の中で待っている時がありました。何気なく見渡す風景の中にその人が飛び込んできました。することもないので、ぼんやりながめていると、ほうきを片手に駐車場の中のごみを求めて、せわしく動いていました。あいかわらず、来るお客さん一人ひとりに、「いらっしゃいませ」と声をかけ、ぺこりと頭を下げています。何か、見ていて、とてもかわいそうになってきました。

「何で、こんなことしているんだろう。やめればいいのに。お店の人も何で障がいを持つ人に働かせるんだろう。仕事だって、他の人の方がもっとたくさん、はやくできるかもしれないのに。無理矢理やらされているのかな」。私は、勝手にいろいろと想像していました。この日のことを夕食の時に姉と話していたら、父が言いました。

「その人を一番良く理解している人は誰だと思う？ お店だって、他の人ならもっと早くできるかもしれないけれど、そうしたら、障がいを持つ人は働きたくても働く場所がなくなってしまうだろう。お店の人は、その人をよく理解して働いてもらっているんじゃないかな」

私は、ドキッとしました。今まで意地悪をしていると思っていた人が一番の理解者だったなんて。私自身が勝手に思いこんで、いつの間にか偏見のようなものを作ってしまったのです。そのことに気がついた時、すべてが違って見えました。あたりを見回すと、店から駐車場すべてがきれいでした。それは、その人の働きのおかげです。

それに、「いらっしゃいませ」と頭を下げて持ち上げた時の顔が、笑っていることに気がつきました。お客さんも笑っています。特別な目で見ていた自分がとても情けなくなりました。

人と人のコミュニケーションって、自分自身の考え方ひとつだと思いました。いつ自分が障がいをもってしまうかもわからないし、障がいがあっても特別なことではないということをもっと早くからよく理解しておけば良かったと思いました。

社会には、体の不自由な人はたくさんいます。誰もが快適にすごせる社会をつくるには、一人ひとりが思いやりを持って助け合うこと、福祉に対する理解と行動力を持つことがとても大切だと思いました。

この間、お店に行ったとき、思いきって、私から「こんにちは」と、あいさつをしました。その人は、びっくりした顔をして、それからにっこりと笑い、あいさつを返してくれました。たった数秒間、あいさつをただけだったけれど、とてもうれしくなりました。

私は、少しでもいいから、他人の役に立てることを当たり前のようにできる人間になりたい。そしてみんなが、やさしく支えあう素敵な社会をつくりたいと思います。

私を目覚めさせた悪夢

(原文は英語)

クリスティーナ・カラウス (18 歳)

モルドバ・ソロカ市

C・ステレ理論高等学校

私を変えた体験は、2010 年 10 月のある悲しみに満ちた日に始まりました。その朝、私は、叔母の配偶者が亡くなったとの突然の知らせに起こされました。不意の心臓発作が、まだ 28 歳だった叔父を私たちから奪ったのです。

それは、私たち家族にとって辛い試練のときとなりました。叔父は一人っ子で、ご両親の落胆ぶりは計り知れぬほどでしたが、それに加えて叔父には 2 人の幼い子がいました。叔父の死によって、叔母は残された 6 歳の息子と 1 歳の娘を一人で育てなければならなくなりました。葬儀は悪夢のように辛いものでした。たくさんの親戚、知り合い、友人そして家族が集まり、若き父親であった叔父と最後のお別れをし、辛くても受け入れざるを得ないこのときに、叔母や私たち家族に寄り添ってくれました。誰もが目に悲しみをたたえ、喪服に身を包んでいました。悲しみと落胆がその場を埋め尽くしていました。本当に悪夢のようでしたが、この体験が私の意識を目覚めさせ、世界を変えたい、良くしたいという思いを呼び起こすことになろうとは、その時は思ってもいませんでした。その混乱と痛みの中で、私の周りの世界が止まったように思われた一瞬がありました…。私は周囲を見回し、その痛みは氷山の一角にすぎないことに気付いたのです。葬儀が終われば、このたくさんの人たちは、辛い試練に見舞われた叔母に同情し、気の毒だと話しながら家路に着くでしょう。でも少し時が経てば、彼らは忘れてしまうのです。でも叔母は違います。生涯この痛みは消えることなく爪あとを残すでしょう。叔母は 30 歳で、養育するお金もないまま 2 人の小さな子どもを抱える未亡人となりました。叔母はちょうど育児休業中で、夫が唯一の稼ぎ手だったため、経済的にも貧窮し、精神的にも肉体的にも疲れ果ててしまいました。

そのような悲惨な苦境から立ち直るには、人は強さと勇気を持たなければなりません。彼女に勇気をもたらしたのは、子どもたちに人並みの生活をさせたいという願いでした。しかし、彼女を支えることができるのは、彼女の家族である私たちでした。子育てと子守りを助けてもらうため、私の祖母

の家に同居することになりました。私の母ともう一人の叔母が、精神的なことはもちろん、経済的にも支え、亡くなった叔父のご両親も様々な形で援助してくれています。こうした家族の助けと支えによって、叔母の生活は少しずつ良くなり始めました。今では、状況は安定し、叔母は前向きな気持ちで、人生を歩もうとしています。

「本当に暗いときにこそ、星は見える」というラルフ・ウォルドー・エマソンの言葉を思い出します。これは私の置かれた状況にも全くそのまま当てはまります。私の家族が経験したこのような状況の中で、私は困難な問題に向き合い、そしてそれに対する答えが、世界を良い方向に変えたいという私の道しるべとなったのです。「叔母は、私たち家族がいなかったら、一体どうなったのだろうか？ 外部からの助けがなかったら、どうなったのだろうか？」と、思いを巡らすようになりました。しかし、世界には、叔母と同じように切羽詰った、あるいはもっとひどい状況にありながら、支えてくれる人が誰一人いない、一人ぼっちの女性たちがいます。「そうした人たちはどうするのだろうか？ 人生のこうした大きな喪失をどのようにして乗り越えていくのだろうか？ 誰が彼らを助け、誰が彼らの支えとなるのか？ それに…、そもそも助ける人はいるのか？」。こうした疑問が頭に浮かんだ時、私の意識が目覚めたのです。私の心と体のあらゆる細胞に、神の啓示が染み渡ったように感じたのです。解決策を見つけよう、自分自身がその解決策の一つになろうと決意しました。

18 歳になり、自分で NGO を創設するために必要な情報をすべて集め、事務手続きを始め、そしてとうとう NGO を設立しました。NGO は現在正式に開設され、困惑した状況に置かれている女性の支援を目的としています。私たちを必要としている女性一人ひとりの支援拠点となることを目指しています。そこで彼女たちは、精神的なサポートを得られると共に、自己開発・啓発のトレーニングやセミナーに参加し、同様の状況にある仲間と話をすることで、理解し合う機会を持つことができますし、そこには彼女たちをケアし、彼女たちが頼ることのできる人たちがいるのです。それに加えて、私は、女性が抱える問題や人権その他社会問題に取り組んでいるいくつかの国際的な若者の団体やネットワークに加盟しています。彼らと、そして世界のあらゆる若者と力を合わせて、世界を変えるような建設的な目標を達成し、世の中を良くし、より豊かで素晴らしい平和な世界を築きたいと願っています。

私を変えた体験

(原文は英語)

ベエジャット・サハル・ジュナイド (22 歳)

パキスタン・カラチ市

私は、かつて小川だった地面の上を歩いて行きました。周りにいるのは、「動物」扱いされている人々です。実は、私自身は、そこにいるはずのない人間でした。マチュチャール・コロニーは、カラチ市内の認知されていないコミュニティで、犯罪の巣窟だったからです。くしゃくしゃになった無数のビニール袋が悪臭の中を漂い、私が足を進めるたびに、埋め立てた地面の下でぬかるみが音を立てます。小道の両側に点々と見えるぼろぼろの麦わら帽子からは、好奇心に満ちた顔がのぞいて、ヒールの靴で無造作に歩く私の足取りをじっと見ていました。そうした中、私はボランティアを申し出た学校にようやく辿り着きました。

壁に大きく楕円形に開けられた穴が学校の入口で、穴だらけの布がカーテン代わりにかけられていました。建物には 10 部屋あり、それに小さな中庭と裏庭がありました。教室から教室へと進んだ私は、欠けているものがあることに気がきました。教師の姿です。子どもたちは賑やかに遊び回っていました。机は落書きされたり、障害物競走の障害物に使われたりしていました。年かさのいった男の子たちは、煙草を吸いながら気だるそうにぶらついていました。それはまるで、学校に通うことで、犯罪の世界に足を踏み入れる前の、足早に去りつつある残りわずかな少年時代にしがみついているかのようでした。

最後の教室でようやく教師を見つけました。彼女は携帯電話でのおしゃべりに忙しくしていたので、私は待つことにしました。電話が終わると、私は自己紹介をし、教育実習を希望してここに来た旨を説明しました。その本心を疑い、いぶかしげに私を見たその教師は、いろいろ質問をしてきましたが、私の目的が何であれ、彼女を巻き込むつもりはないことを理解すると許可を出し、再び楽しそうなおしゃべりに戻りました。

私は、果たして何から手を付けたらよいか分かりませんでした。紙類、鉛筆、消しゴム、クレヨンを含めた箱を 1 つ持参してきたので、まず子どもたち全員を集めて、紙と鉛筆を渡しました。黒板に円を描いて、それを写すように言いました。しかし驚いたことに、彼らは鉛筆の持ち方すら知りませんでした。鉛筆をまるでナイフのように強く握ったのです。おそらく先の尖ったものは、そのように手に取るものだと思っていたのでしょう。私は、一人ひとりの手を取って、描き方を教えました。苦勞の末、基本的な形の描き方を教えることができました。

この居留地の子どもたちには、暴力の能力しかないと常々言われていましたが、彼らがいかにもの分かりが早いかを知れたことは、嬉しい驚きでした。家族や友人からは、一様に反対されましたが、私は汚水でぬかるんだ道を歩いて学校に通い続け、毎日新しいことを教えました。彼らは飲み込みが早く、私の手元には、色の組み合わせもよく考えられた美しい絵が集まるようになりました。特に印象的なものも2〜3枚ありました。それらは、自分たちが住むマチュチャール・コロニーを素晴らしい場所のように描いたものでした。汚水の水溜まりの代わりに、花々が咲き乱れる豊かな緑地が広がっていました。人々は、あの疑り深い険しい表情ではなく微笑みを浮かべ、きれいな小川では、子どもたちが泳ぎ、釣りを楽しんでいます。もう一枚の絵は、口紅をつけ、ハイヒールを履いた私のような若い女性たちが、真剣な表情の子どもたちに勉強を教えている様子でした。また、あまり上手ではないものの、居留地のお店や道路を描いた絵からは、希望の歌が聞こえてくるようでした。これが、子どもたちの夢見る地なのだと分かったときには、胸が痛みました。彼らは、自分たちの居留地に可能性を見出していたのです。そのことは、暗く絶望的なこの場所に対して、新たな希望を私に与えてくれました。

子どもたちは、目の前に与えられたものは何でも学び取ります。銃を与えれば、自然と銃を上手に使う術を身につけるものです。私は、当初、そのつもりはありませんでしたが、彼らにアルファベットを教えることにしました。彼らはすぐに英語を習得しました。数字を教えれば巧みに操り、小さな数学の天才になりました。英語でおしゃべりをし、分数の計算をする彼らを見るにつけ、私立学校に通う子どもたちに負けないほどの優れた知力に、誇りを感じずにはいられませんでした。

運命が決まっている人は誰もいません。誰もが与えられた機会を活かして、自らの運命を作っているのです。社会のある一部の人たちが弱い立場にあったとしても、それはもともと能力を欠いているからではありません。私たちも彼らの墮落の一端を担っているのです。マチュチャール・コロニーから私が学んだことは、人々にはあらゆる可能性があるということでした。どのようなことでも彼らは与えられれば、それを習得します。不公平に扱われれば、犯罪の道を進んでいくでしょう。商売を任せられれば、ビジネスの成功法を見出すでしょう。健康への意識を啓発されれば、衛生の模範となるでしょう。教育というツールを与えられれば、最も優れた偉業を生み出すでしょう。

しかし、何にもまして彼らが必要としているのは、チャンス、すなわち、自分の能力を発揮する機会なのです。

日本とガーナのかけ橋

(原文)

丹 由美子 (10 歳)

日本<ガーナ・アクラ市在住>

アクラ日本語補習校

「日本のおばあちゃん、大丈夫だったの？」

学校で、会う友だちに次々に聞かれた。2011 年 3 月 11 日、東北沖大地震しんが、日本列島をおそった。たくさんの人々がこの地しんで命、家族、友だちそして大切な人を失なった。

私のおばあちゃんは、北海道に住んでいるので被害はなかった。しかし、いばらきに住んでいるおばさんは、電気のない生活が続いた。日本で電気のない生活を送るなんて、私には信じられなかった。

「日本から遠くはなれたアフリカのガーナで私たちにできることは何だろう」。ガーナに住んでいる日本人の人たちが、一生けん命考えた。その結果、私たちはアクラで一番大きいショッピングモールで、ぼ金活動をするようになった。私と弟たちは、手作りのぼ金箱を用意した。

当日、きん張しながら、ぼ金会場へと向かった。日ごろから、よく私たちに「お金をください」とやってくる人たちを通りでよく見かける。「本当にぼ金をしてくれるのだろうか」。私は不安になった。

「ヘルプ・ジャパン」店の入り口にならんで、私たちは通り行く人々に大きな声でお願いした。「そうだね、日本を助けなきゃ」。おどろいたことに、道行く人々は立ち止まって来て、とくに 5 才の弟のぼ金箱には、たくさんのお金が集まった。

「ガーナの人々が、日本を助けてくれるなんて」。心配がふっとんで、本当にうれしかった。私はずっと、日本がガーナを助けなければいけないと思っていた。でも、この体験を通して、ガーナの人もこまった時には、日本を助けようとする気持ちがあるんだということが分かった。

「おばあちゃんをガーナにつれて来れば、いいじゃない」と学校の先生が心配して、私たちに言った。「お金を日本に送りたいかったら、だれにあげればいいの」。と言ってくれた友だちもいた。テレビでは、日本の地しん後の悲しいシーンが日々放送された。私もむねがいたかったし、テレビを見ていた友だちたちも、心から日本のことを心配してくれた。

ガーナには、野口英世の研究所がある。そこから、日本の地しんの被害にあった子どもたちに、ガーナチョコレートが送られた。ガーナのチョコレートは、とてもおいしいので、みんな喜んだにちがない。ただのチョコレートではなく、みんなのはげましの心がこもった元気チョコレートだからだ。

この体験を通じて、私が学んだことは、地球は一つであるということだ。こんなに遠いアフリカとアジアでもニュースはかん単に伝わる。いつもは日本がガーナを助けているけれども、日本にたいへ

んなことがあれば、ガーナの人たちも日本を助けたいと思う気持ちでいっぱいだということが分かった。

日本の人たちに知ってほしい。ガーナには、お昼ご飯も食べられないのに、日本のためにぼ金をしたいと思っている人たちがたくさんいるということ。ぼ金活動をしていた時、私の学校のそうじのおばさんが、たまたま通りかかった。ハンカチの中につつんだ1セディを、大事そうに取り出して、ぼ金箱の中に入れてくれた。ガーナの人たちは、本当にやさしい。

困っていれば、助けたいと思う気持ち、それは人間みな同じだ。その気持ちがあれば、世界はきっと、戦争のない平和な地球になるだろう。この体験を通じて、私はそう思った。

自然との共存

(原文)

廣山 実穂 (12 歳)

神奈川県

不二聖心女子学院中学校

私自身の一つの考え方が変わったのは、ある作品を見た時です。それは、『スタジオジブリ物語』という番組です。その中でとりあげられていた「水俣病」についての話しは、私の考えを一変させました。

水俣病に関しては、小学校五年生の時に社会の授業で学習しました。水俣病の映像を見た時は、おもわず目をそむけたくなるものでした。「水俣病」というものが日本で起きている事実、それも私達の祖父母達が若かったころに起きたということも信じがたいものでした。

「水俣病」は、四大公害病の一つで、症状としては「有機水銀が体の中にたまり、中枢神経や脳がおかされたり、体がしびれて動けなくなったり、口が開けなくなったりすること」です。水俣病にかかった患者は、赤ちゃん、そして子供から大人まで、多くの人間、男性、女性であり、みな苦しみました。原因はチッソ水俣工場の排水で海や底に住む魚などが汚染され、それを食べたためです。又、人間の公害被害はもちろん、水俣湾も汚染されてしまいました。そのため、漁業はできなくなりました。海から引きあげられた何千もの売物の魚が処理されず、港におかれたままの状態の様子の映像もそのまま私の記憶に刻まれました。

私にとって水俣病の知識はそれぐらいでしたが、続きがありました。

「死の海」と呼ばれた水俣湾は数年後、多くの魚が見られる海となりました。岩にはたくさんの岩カキがついていたようです。そして驚くことに海中のドロから新しい細菌が発見されました。この細菌は、水銀を浄化する能力を身につけていました。すなわち、自ら、海を浄化するために変化したものでした。

私は目が覚めた感じがしました。今まで地球上で人間が中心であり、全ては、人間によって決められているように感じていました。「自然の恵み」という言葉を使っていながらも、無意識に自然の驚異や、畏敬の念を忘れていました。自然の中に人間が存在しているのではなく、人間が存在してその中に自然があるように思っていたのかもしれませんが。

しかし、この水俣病での事実を知った時、人間は「自然」に助けられていて、自然がまるで人間の行いの後始末をしているふうに感じました。

人間は、自然の中の小さな存在であり、おごってはいけないと思うようになりました。私達はもっ

と自然の驚異を感じ、自然に畏敬の念を持って暮らしていかなければいけないとも感じるようになりました。

私はそれを知るきっかけとなった、ジブリ作品が好きです。ジブリの作品は自然と対照的な人間が描かれており、相反しながらも共存していこうとする小さな人間の努力がもりこまれていると思います。日本の国内だけでなく、世界中の人達、子供から大人まで多くの人間を魅了させるのは、それは文化が違っていても、この自然と人間の間を無意識にでも感じるからだと思います。そして、作品の持つ意味を心で感じているからだと思います。だからこそ、私自身も何度観ていても、いつも新しい発見をしたり、深い感動を感じるのだと思います。

私は、まだまだこれから、数学や科学、文学や芸術を学んでいかなければなりませんし、又、たくさんの方の知識を増やしていきたいと強く考えています。ジブリ作品を手がけている、宮崎駿さんとくが、例えば『風の谷のナウシカ』のような作品を通してうたえている、科学の進歩と自然への共存、自然と共に生きていく道を考えさせるようなものを私のできる形で社会に表現していきたいと思っています。

地球に優しい開発を求めて

(原文)

水木 陽菜 (12 歳)

長野県

松本秀峰中等教育学校

春。私の好きな蝶、「コツバメ」が一年に一度だけ現れる時期。「コツバメ」というこの蝶は、里山から山地にかけて生息し、飛ぶ時にしか翅開くことはないという裏面が茶色の地味な蝶である。太陽の出ている方向に翅を向け、太陽の光、熱をエネルギーとして生きているソーラーパネルのような生物である。今年も「コツバメ」を観察する為に、溪谷付近へ行った。一年に一度だけ、春にしか現れない動植物のことを「スプリング・エフェメラル」と呼ぶ。春にしか現れないため、毎年、春の天気の良い日は気が気ではない。私が蝶の研究を始めて今年で 3 年目になる。何故、蝶の研究をしようと思ったのか。それには、あるきっかけがあったからだ。

ある日の理科の時間だった。「月と太陽」の勉強をしている時、先生から月と太陽はどちらが速く回っているかという質問を受けた。その質問に対して私は自分なりに考え、結論を出した。太陽の方が速く回っているのではないかと。見事にその結論は当たっていた。そのことが嬉しくて嬉しくて、私は理科が好きになった。そう。これが私を変えた体験である。きっかけは「月と太陽」であったが、理科学全般に興味を持つようになった。

私には将来の夢がある。それは、科学者になることだ。今は、「コツバメ」の生態と、太陽光発電に視点を当て、その夢に向かって観察したり実験したりしている。1 年目は、まず広く蝶の光走性について調べた。自分が蝶の気持ちになって観察し、記録した。さらに、蝶から見ても輝く鱗粉はどんな特徴があるのか等、疑問に思うことはどんどん調べていった。その結果、分かったことは基本的な蝶の生態である。蝶はとても繊細な生物であり、自然の草花や仲間、天敵と合理的に生きている。自然の中をかけ回り、観察してきた中で、著者だけでなく、自分の体験で発見したり知識を得ることができた。その体験をふまえて 2 年目は遂に「コツバメ」に注目し、ソーラーパネルの構造についても学習してきた。私の考えている構想は、翅を斜めに傾け、太陽の光や熱を吸収し、エネルギーにしているこの「コツバメ」の構造を利用して、ソーラーパネルに組み込むことができれば、電力効率が上がるのではないかと。しかし、翅をそのまま利用すると、逆に自然破壊につながってしまう。そこで、その構造を更に研究して、人工的にソーラーパネルへ導入することができるのではないかと考えている。

私たちの地球は、現在、地球温暖化や砂漠化など、環境についての問題が増えつつある。火力発電

は、続けていくことで二酸化炭素が増え、石灰や石油が無くなる一方である。そんな今、ずっとあり続ける資源、太陽を発電源としたソーラーパネルが地球を救ってくれるのではないかと考えた。しかし、家庭用ソーラーパネルでは吸収したエネルギーの約 20%しか電力に変えられていない。私が考える「コツバメ」の翅をヒントにしたソーラーパネルが開発されたら、電力に変えることのできるエネルギーが増え、結果、地球温暖化などの環境問題が食い止められると思う。限りがある資源に頼らず、交通機関や家庭用、工場など効率の良いソーラーパネルで世界中の人が生活していけたら、どんなに地球に優しい環境が作られるのかと、楽しみである。このことが実現されるのはまだまだ時間がかかりそうだ。しかし、いつかこのソーラーパネルが開発され、生物がもっと伸び伸び生きていけるような未来の地球環境になれば良いと思う。そして、そのような夢を持つきっかけを作って下さった理科の先生や、研究に助言して下さった先生方に感謝している。この春、「コツバメ」が産んだ、小さな卵を発見した。今年は、その卵を大切に育て、もっと詳しく蝶について研究しようと考えている。

乾いた都市

(原文は英語)

レシャン・ルーニナ (13 歳)

ケニア・ナイロビ市

ブレーサイド・インターナショナル・スクール

こんにちは！ 僕の名前はトゥウィガです。年齢のわりにすごく背が高いので、トゥウィガ（スワヒリ語でキリン）と呼ばれています。ケニア北部のマルサビット県に住んでいます。マルサビットではほとんど雨が降らず、1 年の大半は作物もできません。雨が降ることも時にありますが、霧雨のような雨ですぐに地面にしみ込んでしまいます。僕たち一族は一緒に暮らしており、遊牧民なので牧草を捜して移動するのですが、ケニア北部では牧草もなかなかありません。

学校に行くことがいつも夢でした。でも僕たちは遊牧民なので学校に通う時間などありません。政府の役人が何度となく一族の長老たちのもとに来て、僕やいそこを学校に通わせるよう説得につとめました。そうした訴えに耳を貸すことはなく、役人たちも要求するのをやめてしまいました。一族の中で字が読めるのはただ一人僕の父だけです。父は牛の世話をしながらも隠れて学校に通い、高校を卒業しましたが、お金がなかったため大学には行けませんでした。

僕は父に刺激され学校に行きたいと考えるようになりましたが、問題は、一番近い学校ですら何マイルも離れたモレヤにあり、そこに着くまでに何日もかかってしまうことです。

とはいえ、学校に通うことは僕にとって二次的な問題であり、何よりも大切なことは水を見つけることです。半乾燥地帯に暮らすということは、水が足りず、水はとても貴重だということです。僕たちがオアシスから掘り出した水が無駄遣いされるのを目にすることは本当に心痛むことです。牛やラクダに水を飲ませたり、水浴びさせたりするのに使うのは納得がいくことですが、水を地面に注いで、水がしみ込めばご先祖様がその水を飲んだことになり、しみ込まない場合はその水には魔女が宿っているという奇妙な儀式にも使うのです。それを見ると僕はいつも、貴重な資源を大事にしないと世界はどうか考えてしまいます。水がもはや必需品ではなく商品となり、動植物は絶滅し、食べ物はすべて合成食品であるような世界を想像してみてください。だからこそ、僕はいつも、確保した水の使い方に気を付けています。モンバサやトゥルクウェルの人たちはどのように水道水を得ているのだろうと長い間知りたと思っていましたが、川に大きな壁を建てて水をせき止め、それが湖のようになっていると父から教わりました。多くの国では、貯蔵された水は、パイプで水処理場に送られて、洗濯、掃除、さらには飲料水用に適した水ができると聞きました。そこで僕は、大きなエワソ・ンギロ川にダムを建設する計画を考えました。

このようにすれば、僕たち一族をはじめ他の一族も遊牧民の生活をしなくてすむようになります。定住し、子どもたちは学校に通い、卒業して、大学へも進学できます。ただ問題がひとつありました。僕はまだ子どもなので、ナイロビには一人で行けません。だから、父に計画を打ち明けました。父は僕の考えに賛同してくれ、一緒にナイロビに行こうと計画してくれました。僕はいつも首都のナイロビに行ってみたいと思っていました。そしてとうとう僕たちは飛行機でナイロビに行きました。僕にとって、それはすばらしい経験でしたが、父は木の葉のように震えていて、「空を飛ぶのは鳥であって、人間のすることではない」と言いました。大笑いしてしまいました。一族で最も学識があり、最も尊敬され、最も知性ある人が飛行機が怖かったなんて。

ナイロビに着くや、街の大きさと活気に本当にびっくりしてしまいました。車があふれ、人々は他人にお構いなしで歩いていました。多くの人がブリーフケースを持ち、携帯電話に向かって話していました。その後僕たちはナイロビの中心にある商業地区の小さなホテルにチェックインしました。二人とも疲れ果てていて、うとうとしましたが、あのような騒音の中ではなかなか眠れませんでした。

翌日僕たちはマジ・ハウスにある水灌漑省に行き、僕の考えを大臣に説明しました。大臣はすっかり気に入ってくださり、エワソ・ンギロ・ダム建設を実行に移してくださったのです。ダム建設のニュースは山火事のように瞬く間に広がり、マスコミをにぎわせましたが、幸運なことに父と僕は報道記者たちにつかまりませんでした。

マルサビットに帰ると、一族の皆がナイロビでの僕たちの活躍ぶりを聞いて祝宴を開いてくれました。ダムはまだ建設中です。今では僕たちを含め多くの一族が、その環境から「乾いた都市」と呼ばれているエワソ・ンギロ近くの町に定住しました。

僕たちは皆、貴重な資源を供給し、守るための新しい方法について考え始めるべきです。例えば、お湯を沸かしたり、家を暖めるのに太陽光発電を利用することができますし、電気を得るのにバイオガスや風力を利用することも可能なのです。

僕の発見

(原文は英語)

レイモンド・チョー (14歳)

韓国 (東京都在住)

セント・メリーズ・インターナショナル・スクール

僕は、ガンジーでもトーマス・エジソンでもありません。自分の国の人々を自由へと導くこともできなければ、人々の生活を変えられる「電球」のような大発明をする能力もありません。心の底では彼らのようになりたいと思っていますが、僕も14歳ですから自分の限界は分かります。

しかし、自分の限界を知っているからといって、いつか世界を変えることを夢見たり、そのための努力ができないということではありません。実際に、僕が手本としている偉人たちは、1日で指導者や先駆者になったわけではありません。時間はかかりました。そして、彼らの第一歩はとても単純なものでした。それは「前向き思考」です。

自叙伝を読んで、全員に共通している一つのこと分かりました。それは前向き思考です。最初はとても簡単で誰でもできそうに見えます。確かにそのとおりです。しかし、本当に問題なのは希望を失わずに続けられるかどうかということです。「世界を変える」という、他の人にできなかったことを彼らができた理由はここにあると思います。

僕は理科を学び、実験が大好きなので、仮説を立てればそれを検証することができると考えました。僕の仮説(実験)は、1カ月間いつもどんなときも前向きでいて、普段の月より良い結果をもたらすかを比較するというものでした。

正直に言うと、思っていたよりも大変でした。投げ出したくなるときや、頭にくるとき、怒りたいときは何回もありました。前向きな人と見られたいなら、心から本当に前向きな気持ちにならなければ、それは外には現れません。

最初のきびしい試練は、初めて歴史のグループ学習をしなければならない時にやってきました。先生がグループ分けをして、僕たちはグループ発表をすることになっていました。先生が僕の実験のことを知っていたかどうかは分かりませんが、僕はクラスで一番勉強をしない生徒のグループに入れられてしまいました。人を勝手に評価するべきでないのは分かっていますが、別の「頭のよい」グループだったら良かったのにと本気で思いました。「昔の僕」だったら、「全く運が悪い。うまくいくはずがない」と思ったことでしょう。このとき、僕は否定的に考えず、無理をしてでも前向きに考えることを始めました。意見を求めるときには、本気で相手の意見を聞き、グループの仲間と作業をするように努力しました。放課後に残って一緒に作業をするよう提案し、グループの仲間に「自分たちは

できる」と思わせるよう努力をしました。僕のグループは、悪い点数を取ると始めから思っていたのか、僕のしていることに全く関心をもってくれませんでした。でも、僕が前向きなことを言い続けたので、時が経つにつれて、驚いたことにグループの仲間たちが一緒に作業をするようになったのです。そして、うれしいことに、結局僕たちのグループはこの課題でA+の評価をもらいました。1カ月間、前向き思考を続けたことで、僕は、学校や仲間に対する友だちの考え方も変えることができました。

もちろん、これを「単なるまぐれ」ということもできるでしょう。そこで、「前向き思考で自分と自分の周りの世界を本当に変えることができる」を証明するため、もっと本を読んで、これが他の人にも当てはまるかどうかを確かめる必要があります。

調べてみて、偉人は成功する前に何度も失敗を重ねているのに衝撃を受けました。彼らを成功へと導いた原動力は前向き思考でした。どの人も希望を捨てず、どんな結果にも明るい面があると常に考えていました。個人的に大好きな言葉の一つに、トーマス・エジソンの言葉があります。「電球作りに何回も何回も失敗したときにどのように思ったか」という記者の質問にエジソンが答えた時の言葉で、「失敗したのではない。電球を作るには、それだけ多くの段階が必要だったのだ」というものです。

結論として、実験や調査を行ってみて、世界を変えることができる僕の発見は前向き思考だと思います。物事を前向きに考えることができれば、前向きに行動し、人を前向きに変えることができます。これを続ければ、池に小石を投げるとさざ波が池全体に広がるように、より良い方向に変わっていくと思います。

祈りの力

(原文)

対本祝子（16 歳）

日本＜英国ロンドン市在住＞

帝京ロンドン学園高等部

去る 6 月 5 日の午後、私は冷たい雨の中、ロンドンの中心部へと急いで赴いた。やがて、すれ違う人々は正装した日本人が多くなり、異国の街としては、一種、非日常的な風景を醸し出していた。日本人の列の流れは、やや雑然とした往来を横切り、かの名高いウエストミンスター寺院へと入って行く。そう、私たちはこの寺院で行われる東日本大震災追悼式典に参加すべくやって来たのだ。

ウエストミンスター寺院といってまず思い浮かぶのは、つい先日行われた華麗なロイヤル・ウェディングだろう。すべての英国人が彼らの幸せを祈ったその場所で、私たち日本人は震災犠牲者の冥福と母国の復興を祈るのだ。寺院に高々と掲げられた日本の国旗は、このミサが日本人のために行われる式典であることを象徴していた。

ロンドンで学生生活を送っている私が東日本大震災の勃発を知ったのは、3 月 11 日の明け方であった。BBC のニュースをつけて、一気に眠気が吹っ飛んだのを今でも鮮明に覚えている。初めは何が起こったのかわからなかった。しかし、実況映像を見ているうちに、全身に鳥肌が立って言葉を失った。翌日の新聞の第一面には、日本の被災地の凄惨な写真が大きく掲載されていて、あらためて事の重大さが理解できた。

英国人たちの行動は早かった。すぐに様々なチャリティー活動が展開され、街角では日本の被災地への救援金や義捐金が集められていた。ある新聞の表紙には、日の丸と「がんばれ日本、がんばれ東北」の文字が掲げられ、見ず知らずの人々が私を励ましてくれた。このような英国人の優しさが、今回のミサを開催する原動力となったのであろう。

式典は厳かに行われた。聖書の言葉が読みあげられ、讃美歌とパイプオルガンの音が聖堂の高い天井に響き渡った。そうするうちに、なんと宮澤賢治の「雨ニモマケズ」が朗読されたのだ。その言葉の力強さは、身に迫るものがあった。私は、ああこれも祈りなのだと思った。今まで、私は祈りというと、手を合わせて、または跪いて神に捧げるものだと思っていた。しかし、そういう形でない祈りもあるのだ。朗読を聞きながら、誰もが平和で安穩な世界の到来を願ったであろう。また、日本が力強く復興していく光景を心に思い描いたであろう。私は、この「雨ニモマケズ」の詩が、私たちの心を静かに導き、参列者の心を一つにまとめ上げていくように感じた。

私は、祈りとは「思いの力」だと思う。復興も再生も「思い」がなければ始まらない。「思い」があ

ってこそその行動なのだ。世の人は祈っているだけでは何も変わらないと言うけれど、祈りこそが苦境にあえいでいる時に、最も必要とされるものではないかと思うのだ。確かに、今の私には祈ることしかできないが、それは決して微々たる力ではないように思える。ウエストミンスター寺院に集まった多くの人々が、心を一つにして同時に祈ることで、「思い」は大きな力となり、被災地へ届いたのではないだろうか。

もう一つ私の心を動かしたのが国際協力だ。英国人の日本に対する優しさも、助けたいという強い意志も肌身で感じ取ることができた。多くの人々が日本の復興と幸せを祈っているのだ。私は、これらの中に真の温かい国際協力を垣間見たように感じた。

今回の大災害は、私を変えるきっかけとなった。それまで形でしかなかった祈りをあらためて考え直し、真の祈りとは何かを知ることができた。そして、今まで政治的な言葉としてしか捉えていなかった「国際協力」という言葉の根底にある「思い」を理解することもできた。私は将来、今回切実に感じ取った「思いの力」をもって、国際社会に働きかけていきたい。「祈りの力」や「思いの力」は無限大なのだ。

素晴らしいひらめき

(原文は英語)

パルバナナタン (16 歳)

シンガポール

「地球は全ての人の必要を充足せしめても、彼らの欲を満たしきることはできない」。車で渋滞するインドの街で、排気ガスの中を歩いていると、マハトマ・ガンジーのこの言葉が頭に浮かんだ。耐え難い暑さに我慢も限界となり、涼を求めて近くの建物の影に立ち止まった私の目に入ったのは、不可解な男の人の姿だった。何か目的でもあるかのように街角で必死にペダルを漕いでいるのだ。好奇心から近寄ってみると、なんとおもしろいことに、それはコンピュータに接続されていた。一体、何をしているのかー興味津々で、是非知りたいと思い、その人に声をかけてみた。

「ああ、この機械は環境団体の人からもらったんだ。ペダルを漕ぐと、コンピュータに電力が供給される仕組みだ」と、彼はつぶやいた。すっかり驚いた私は、その素晴らしい発明の構造に見入った。独創的でシンプルでありながら、コンピュータの電源を供給し、さらにはいくつかの電球を点すこともできるこの機械を見て、私は排出ガスのない（ゼロエミッションの）クリーン電力を発電するというアイデアに好奇心をかき立てられた。これこそ、エネルギー生産が目指すべき最高の目標である。環境悪化や地球温暖化の弊害の中で、人々の生活や国の美しさが破壊されているインドや中国のような国へ大きな恩恵をもたらすことに違いない。

ゼロエミッション技術についてさらに考えを深めていった私は、そうした技術が一般大衆に利用可能なものであることが不可欠だと気付いた。技術進歩が遂げられたとしても、それが一般の人々の手に届かなくて何の役に立つだろう。それ以来、世界のエネルギー問題の解決策を見つけたいと、その探究が始まった。私が目指していることの一つは、安価なエネルギーをつくることだ。学生の私には、アイデアを概念化することしかできない。中には、すでに試みられたものも偶然あったが、私は、自分が考え出したアイデアを追求し続け、身につけた科学知識を活用し、様々な装置を設計した。そのひとつが、電磁気力を使ってピストンを動かす電磁エンジンである。このエンジンの模型作りは大変な作業だったが、父の助けを借りてやり遂げた。

私が世界に提供したいと願っている低コストの再生可能エネルギーのソリューションが実用化されれば、まさに画期的なものになる。公害や汚染のない世界という、今は夢でしかない世界が実現するかもしれないのだ。これまでになく、一般大衆がいち早く技術革新の成果を享受できるようになるのである。こうした新たなエネルギー・パラダイムを求めて、私は精力的に新たなエネルギー対策の探究に取り組んでいる。その一環として、アインシュタインの有名な方程式 $E=mc^2$ に従い、宇宙の質

量をエネルギーに変換するというアイデアも研究した。宇宙空間に存在するかもしれない質量からエネルギーを作り出し、衛星で地球に送り返すというものである。このようなとっぴなアイデアばかりだが、理論的には可能だし、最近では部分的に実証されたものもある。こうした発見は、研究者ばかりでなく、普通の人々の心の中にも希望の光をともしてくれる。

マルコーニが信号を無線で伝送するアイデアを持ち出した時、科学界の人たちは彼を狂人扱いした。マルコーニは今や無線の発明者として知られている。型破りな者が笑い者にされたり、排斥されることは珍しくない。私もそうした扱いをされた時には意気消沈したものである。低コストのゼロエミッション・エネルギーについてアイデアを話すと、多くの人は共感した様子を見せるものの、理性ではこの新しい、抽象的なアイデアは受け入れ難いようだった。さらに率直な人たちが何人かには、まったく取り合ってもらえなかった。しかし、否定されるたびに私の心には、敗北感よりもいつもやる気が湧き上がってきた。

いつの日か、そうした人たちがふり返って「あいつの話を聞くべきだった」とつぶやく日がくればいいと思う。

クリーン・エネルギーの最新動向を把握しようと今でも専門誌や記事を読んでいる。わびしくなる時もあったが、今は期待しかない。この壮大な目標の達成を目指して、小さな発明を時々考えている。紙に書き留め、理にかなっているものか検証している。「これだ！」という瞬間はめったにないが、考案する喜びは私にとって探究を続けるエネルギーである。私の国シンガポールでは、太陽エネルギー研究所（SERIS）をはじめ数多くの研究機関が、再生可能エネルギーの新たな躍進に向け、先頭に立って研究を進めている。このような価値あるテーマを推進することは、私の人生の目標の一つであることは確かである。

排気ガスで地球を破壊することなしにこの世界を明るくしたいという情熱が、私の心の中で（最良の自然エネルギー源である）太陽よりも激しく燃え盛っているのである。

光の消えた少年

(原文)

山口 理伎 (17 歳)

東京都

早稲田大学高等学院

人間は生まれたら死ぬのである。これは不変のことであるが、いつどこで生まれたかによってその死に方というものは大きく変わってくる。どのような人生の最期が幸せなものであるかは意見が分かれるところではあるが、日本という国は幸せな死が多い国であることは間違いないだろう。

私は以前フィリピンという国に住んでいたことがある。フィリピンという国は貧しい人が多くおよそ豊かな国とは言い難い。しかし、私は現地では非常に恵まれた生活を送っていたと思う。

現地では私は私立の学校に通っていたが、その学校は高い柵に囲まれ外部との交流は完全に閉ざされていた。物乞いが入ってくるからである。しかし、中から外は見ることもできた。私は、校内から外を眺めるといつもある少年を探していた。乞食の少年である。彼はいつも痩せ細った体に大きなサイズの合わないTシャツをまとい残飯を探すのだった。炎天下の中八工のたかった残飯をあさるのだ。それを横目に私は冷房の効いた教室で授業を受けるのだ。このようにして私から見ればおよそ非日常的な彼の日常は続いたのだ。

しかしある朝、学校の前で、口周りを血で濡らした犬を見つけた。犬といっても日本で見かけるような愛玩犬ではない。痩せて頬骨の浮き上がった犬である。犬同士喧嘩でもしたのかと思っていたが、次に私の目に飛び込んできたのは足から血を流したあの少年であった。目からは光が消えて死んだようにぐったりしていた。しかし彼の死んだような目は2, 3日後には見られなくなった。彼が死んだからだ。おそらく狂犬病であろう。私の教室からは彼が苦しみ、そして死んでゆく姿がよく見えた。死んだあと、街の清掃局員が、彼をバケツの中にごみのように捨てた。清掃局員にとって彼はごみでしかないのだ。私はそれをいつものように冷房の効いた教室から眺めるのだ。眺めることしかできないのだ、私が無力であるがゆえに。しかし、当時の私に何ができたであろうか。今の私にも何もできないだろう。だが未来の私にはできることがあるだろう。さらに言えば何かできる人間にならなくてはいいけない。私はそう考えるようになった。

「少年を殺したのは決して犬ではない社会が彼を殺したのだ」私はこう考えている。おそらくこのようなことは世界中で起きているのだろう。また、戦争などで直接的に社会が人を殺すことも少なくない。多くの場合、社会を動かすのは金銭であるが金銭がうまく社会の中で循環するような社会システムがフィリピンなどの国では確立されていない。

私がフィリピンに住んでいたのは父の仕事の関係であった。私の父は発展途上国への技術援助をすることが仕事だ。どうすればその地域で物を作り、販売し、その日の糧を得ることができるのかというノウハウを教えることをしているのである。父のことは尊敬しているが、わたくしは父と同じ職に就こうとは考えていない。

私は社会のシステムそのものを見直し、正していきたいのだ。国連の経済社会理事会に入ることが夢である。当然多くのことを学んでいかななくてはならない。そのために今日も私は学校に通うのだ。

死んでゆく少年を眺めていた冷房の効いた教室にいた時間を取り戻すのは並大抵のことではないだろう。今の私にはこの平和な国日本で暮らしてはなかなか見えない体験を人に語り問題を提言することが重要ではないかと思う。

おそらくあの少年のことは一生忘れないだろう。あのことを思い出すたびに心臓をわしづかみにされた感覚に陥る。だが何年後になるかわからないが私は再びフィリピンを訪れたい。生気のない目ではなく希望に満ちた目の少年たちと出会うために。

石から人間の心へ

(原文は英語)

ハレン・イセリッチ (18 歳)

ボスニア・ヘルツェゴビナ・サラエボ市

地震か何かで自分が変わったような、大きな話をするわけではない。ただの平凡な男の話だ。実際、人の人生について語るのは難しいことだ。ましてや自分の人生について、何に影響され、どう自分が変わったのかを語るのはなおさらである。どのような事がきっかけで私が変わったかについて理解いただくには、私が何者で、変わる前にはどのような人間だったのかを知っていただく必要がある。私は、ボスニア内戦でサラエボが包囲されている最中に生まれた。祖父は 1995 年に狙撃され亡くなった。その当時私はわずか 2 歳だったが、それでも、それまで人に対して感じたことのなかった憎しみの感情が心に芽生え、大きくなっていった。その数年後、いつも一緒に過ごしていた幼なじみのダミールが地雷で亡くなった。その時、私の中で憎悪がますます大きくなり、善悪の境を越え、善の心を失ってしまった。この事があって以来、殆ど人とコミュニケーションを図ることもなくなった。両親さえ避けるようになり、必要なときにしか会わなくなった。心を閉ざし始め、めったに自分の部屋を出ることもなくなり、隣近所の人たちのことも知らないといったふうだった。とにかく人を愛することができず、さらには、憎むようになっていたのだ。自分が好きだった人たちが死んだのは、周りの人間のせいだと責めていた。

ある晩のこと、学校帰りに犬のように道端に寝転がっている人を見かけた。その男のそばを通るとお酒のおいがした。墓地の近くを通るかのように通り過ぎた。翌朝私は救急車のサイレンで目が覚めた。前夜見かけた男性が早朝に、つまり、私が通り過ぎた数時間後に心臓発作で亡くなったということだった。人間であれば誰しも罪の意識を感じたことだろう。でもそのとき、私は何も感じなかった。そうなのだ、私の心はまるで石のようだった。私が救えたであろう人の命に対して無関心だったのだ。

2005 年 8 月のある朝、暮らしていた建物の中庭で親猫と産まれたばかりの子猫の鳴き声で起こされた。正直なところ、子猫たちが毎日がんばって生きのびようとしているその様子を見るのが楽しみとなった。この子猫たちが私の人生をその後ずっと変えることになるうとは、その時は思いもしなかった。子猫たちに起こされる朝が何日が続いたが、ある日、急に彼らの鳴き声がしなくなった。窓の外を見ると、ある光景が目に入った。1 匹の子猫が通りを渡ろうとして車にひかれ、死んでいたのだ。するともう 1 匹の子猫、死んだ猫の兄弟が、その元に行って体をなめ始めた。その子猫は、まさに路上に横たわる男性を見つけたとき私がなすべきことをし始めたのだ。子猫はなめたり、頭を押したり

していた。それは 1 時間程も続き、その間ずっと見ていた。子猫は驚くほど粘り強くその兄弟を目覚めさせようと懸命だった。いくらやっても無駄なことが分かったと、今度は倒れた子猫の傍に横たわったのだ。最初はちょっとだけ横になったのかと思ったが、実際は横たわったまま、もはや立ち上がらなくなってしまった。死んだ兄弟への愛から傷心してしまったのだ。数時間にわたってこの劇的な出来事を見ているうちに、私の心の石は徐々に砕け、人間らしさを取り戻していった。10 年ぶりに私は涙を流した。泣くという感覚を忘れていたのだが、神殿を飾るオベリスクに彫られている動物、子猫 2 匹が私を変えたのだ。2 匹の子猫の死をきっかけに、私は良い人間になって、また自分の周りの世界を暮らしやすいところにしようと思うようになった。子猫たちを抱き上げ、建物の中庭に埋葬した。この 2 匹の墓を見るたびに私はいつでも、自分が誰であるか、何であるか、そしてどうあるべきかを思い出すだろう。それからはずっと、隣人に会えば微笑み、カフェで会う女の子、パン屋で会う男の子に挨拶をしている。それまで全然知らなかった同じ建物に暮らしている隣人とも何人か知り合いになった。人は、その本来の人間性を取り戻さなければならない。人間性とは、私たち人間が今本当に必要としているもの、すなわち、思いやり、慈悲、平和な共生である。人は、人間の本質に従って生きていくことが大切である。人間性こそ、現在、将来そして一生を通じて、私たちをより良い人間に変えてくれるにちがいないからである。

感情が爆発するとき

(原文は英語)

ンカチュクウ・ンネベンチュクウ・フレドリック (24 歳)

ナイジェリア・エヌグ州

イスラム教徒が多数を占めるナイジェリア北部で流血の暴動が再び勃発しました。以前からあった偏見が不可解な形で今回噴出したきっかけは、遠く離れた地デンマークでの預言者ムハマンドの風刺漫画でした。

南部の主にキリスト教の人たちが暴行を受け、殺害されたのですが、ここでは悲惨な詳細については控えたいと思います。こうした殺戮は衰えることなく続き、3 日目には、南部の都市オニチャに殆どがバラバラにされた 106 人の遺体がトラックで戻されてきました。その痛ましい光景を見守っていたすべての人からはとめどもなく涙が溢れましたが、いくら嘆き悲しんでも亡くなった人たちが生き返るわけではありません。マスコミで報道されていた大虐殺の規模をそれまで疑っていた人たちも、その現実をすっかり思い知るに至りました。キリスト教の人たちに対して続けられている残虐行為の鎮圧に政府は無策だと感じていたオニチャの若者らは、こん棒や鉈を手にとって、北部のイスラム教の人たちを捜しに行きました。報復攻撃を予想した者の多くは身を隠しましたが、良識に逆らって路上に残った者は殺害されてしまいました。

私の村イグボウクウォはオニチャからそれほど遠くなく、午後 2 時頃には報復攻撃が村まで広がってきました。私が父の敷地に入ろうとした時、人々の声がまるで海の潮のように押し寄せてきました。後ろを振り返ると、懸命に走っている 6 人の北部の人たちの姿が見え、そのすぐ後には激怒した若者が彼らを追いかけてながら、石を投げつけていました。6 人の中でも最年長の男性がようやく私の立っているところまでたどり着くと、息も絶え絶えながら、でもしっかりと口調で私の方言で次のように言いました。「息子よ、お願いだから、どうか死なせないでください！」彼らの後ろには、暴徒が迫ってくるのが見え、ちょうどその時投げつけられた石のひとつがひとりの頭部に当たり、その人はふらふらと仲間の腕の中に倒れ込みました。傷ついた頭部から温かい血が流れ落ち、その光景に私は彼らに対し感じていたためらいも一切消えました。自宅の門を急いで開け、彼らは中に逃げ込みました。鉄の門に南京錠をかけてその鍵を高い塀の向こうに投げ入れた私は、近づいてくる暴徒に立ち向かいました。

私の行動を見た彼らは声を上げ、私はこれから自分に迫りくるであろう事の重大性に気付き失禁しそうでした。私のところまで来た彼らは、村で人望の厚い父の名を呼びかけてきました。かくまった人たちを引き渡せ、さもなければ門を打ち破って、屋敷内で彼らを殺害すると脅してきました。私は

懸命に唾を飲み込み一歩も引かずに、苦悩と復讐心に燃えた彼らの目を見詰めました。少しの間話を聞いてくれるよう説得したところ、彼らはその願いを聞き入れました。ただし、最後の決断を下すのは彼らという条件付きでした。

「私たちには、『2人のひとが同時に激怒するのは許されない、1人はもう1人が分別を取り戻せるように冷静でなければならない』という格言があるように、激怒するあまり暴力を使うわけにはいかないのです。」

「昔から一緒に平和裡に同じ方言を話し、一緒に食事をして、暮らしてきた罪のないイスラム教の人たちに残虐なやり方で報復することは、まさに無意味なことであり、北部の事態がこれで好転するはずがありません。仲間の皆さん、感情に任せて行動するのはやめましょう。そうではなく、良心に耳を傾け、石を投げる前に深く考えてみようではありませんか」わたしが切々と語り続けると、ついには、歪んだ彼らの表情もほぐれ、こん棒や石は下に置かれました。奇跡としか言いようのない出来事でした。

「今回ここで救われた人たちは、必ずや北部の仲間を啓蒙するよう努めるでしょう。そして機会があるときにはいつでも私たちに同じように今日の恩を返してくれるでしょう。」と私は最後に話しました。

私はこうして神の導きにより、村にまで迫った報復の芽を絶つことができ、北部の誰ひとりの命も奪われずにすみしました。それ以来私は、イグボウクウォに平和に住み続けている北部の人々からとても慕われています。また地元のヌクウォ市場に行くたびに北部の友人から、ナイジェリア北部の主要産品であるサトウキビをただでもらったりしています。この1つの出来事を通じて、私は、世界中の人々が宗教、部族、言葉の違いにとらわれずに平和に共生することを訴えていく人になりたいと、強く触発されました。あらゆる人々にこの考えを浸透させる機会はまだ得ていないかもしれませんが、日々出会う人々から始めています。多様性にこそ美しさがあるのです。